『琉球新報』2020年7月17日（金）付　第3種郵便物認可

古層を読み今を見る

「県史 各論編9 民俗」発刊

□下

甘藷から米へ移行

食生活、戦後様変わり

萩原 左人

はぎはら・さひと　1961年生まれ。民俗学専攻。琉球大学国際地域創造学部教授。共著に、古家信平・小熊誠・萩原左人『日本の民俗12　南島の暮らし』（吉川弘文館、2009年）など。

干されている甘藷のでんぷん＝2004年、うるま市

このたび『沖縄県史各論編9民俗』（以下『民俗編』と略す）が刊行された。ここでいう民俗は、人々（あるいは自分たち）の普段の生活に関する伝承や慣行を主な対象とするが、その内容はとても複雑である。たとえば毎日の仕事、家族と人とのつながり」、第四部「生をつなぐ」、第五部「人と超自然的世界とのつながり」、第六部「近現代と民俗」で構成されている。本書の特色の一つは、沖縄の民俗を幅広くとらえ、かつ多角的に記述している点である。各論では、風水、泡盛、門中、墓、御嶽、マチグワーなど、読者になじみのあるテーマも詳しくとりあげている。さらに、ハルナー（原名）、ワラザン（藁算）、山原船、哭きうたなどもみることができる。県史のシリーズのなかに『民俗編』が入っている理由も、こうした考え方による。前回の『沖縄県史22民俗1』（1972年）・『沖縄県史23民俗2』（1973年）は、沖縄戦以前の時代からの継続性がみとめられる民俗を中心に編まれていた。今回の『民俗編』は前回から半世紀を経て刊行されたが、その間も人々の生活の内容は大きく変わっている。本書のもう一つの特色は、このような沖縄社会における民俗の変化に注目している点である。

民俗を多角的に

今回の『民俗編』は、「総論」、第一部「人と自然とのつながり」、第二部「人と暮らし」、第三部「人と暮らしと民具」、「首里那覇の都市民俗」、「葬送儀礼の変容」、「シャーマニズムの近代」など、多くの事例に言及している。特に第六部「近現代と民俗」では、近現代の沖縄社会に顕在化した民俗の諸相を特論的にとりあげている。前回と今回の『民俗編』を併せて読むことによって、先人たちの暮らし方から、どのような経緯を経て現在に至ったのかを考えることができるだろう。

変化に注目

特定の時代における民俗の記録は、広い意味で歴史（生活の歴史）の資料としてもみることができる。

各論では、たとえば「戦後の琉装の変容」、「現代ハワイのオキナワン・ボンダンスなどの多くのコラムもあり、沖縄の豊かな民俗の世界を知ることができる。

「食と暮らし」

今回の『民俗編』では、第二部で「食と暮らし」について書かせていただいた。沖縄の食をめぐる話題のなかで、個人的には甘藷（サツマイモ）を主要な日常食とする暮らし方の終焉について関心がある。

かつて農家では、毎朝シンメーナービ（四枚鍋）で芋を炊き、これに汁物や簡単なおかずを加えて日常の食事としてきた。他にも煮芋を練ったンムニー、干し芋、ンムクジ（甘藷澱粉）、ンムカシ（澱粉滓）などがあり、その葉は野菜として、甘藷の残滓と蔓は豚の餌として利用された。

有用な作物である甘藷を中心とした自給的な食生活の形は、沖縄戦による耕地の荒廃と戦後の食糧配給の時期を経て、その後大きく様変わりした。甘藷は戦後も栽培されて食料難の時代を支えたが、庶民の主要な日常食は、次第に甘藷から米（輸入米と沖縄産の島米）に移行していった。生業や食物が変わることは、民俗として極めて大きな変化である。

当時の人々は生活の「世がわり」をどのように経験し、それについてどのように考えていたのだろうか。今後の課題として、さらに聞き書きを続けていきたい。

◇　◇

『沖縄県史　各論編9民俗』（5千円）は県教育委員会のホームページ「沖縄県史料の販売」から購入を申し込める。

問い合わせは県教育庁文化財課史料編集班☎098（888）3939。